

●古希を迎える 九九年六月七日

七〇年を生きて想う

はやくもと言うべきか
ようやくと言うべきか

今日私は70歳の誕生日を迎えた

長い旅路を越えてきたような

あつという間に過ぎてきた人生だったような

定めがたい心のゆらめきがある

しかし まず心に湧きあがる思いは

七十年も息災で生きてこられたと言う事実

七十歳の今日まで現役で仕事を続けてこられたと言う事実

研究者 公務員 経営者という三段跳びの人生を

七転八倒しながらも

思いつ切り駆け抜け来られたと言う事実

この事実への深い感謝と感動である

振り返れば 遠い少年の日

戦争に次ぐ戦争の苛酷な日々

戦後 飢餓と窮乏と混乱の時代

人生の出发点を作ってくれた2人の教師がいた

進学率4%の時代 旧制中学(今の高校)に進学させよと

父親説得に日参した小学校教諭

敗戦後 大学進学を父に説得しに来た英語教師

肯定も否定もせずただ微笑んでいた父

この二人の教師の説得と父の黙認

この3人がいなかったら 私の今日はなかった

この3人が私の一生の出発点を作ってくれた

思い返せば 長い人生の中で

自分の意志を通したのはただ一度

英語教師の官僚コースの勧めを振り切って

東京外語中国科に入ったことだけだった

エドガー・スノーの『中国の赤い星』が私の進路を決めたのだ

だが そこまでとそこから先はすべて恩師 友人 知人 先輩が

頼みもしないうちに次々に用意してくれた道を歩いてきた

最初の就職先だった中国研究所は一年先輩の勧めだった

労働問題の研究所も請われて入った

取手町議も3か月口説かれた末だった

四四歳で神奈川県庁に入ったのは長洲知事の要請だった

KSP社長は長洲知事の命令

神奈川県日中会長は総会での選出

川崎市産業振興財団理事長は高橋市長の説得による

皆に生かされてきた生涯だったと 今しみじみ思う

次々にその顔と名前が浮かぶ

そして 次に湧きあがる想いは

茨城の片田舎の貧しい家に生まれた私が

なぜこんなに稀有な人生を

生きてこられたのかという想いだ

それは恐らくすでに亡き親兄弟や縁者たちの

果たせなかったいくつもの人生を

私が托されて生きてきたからだろう

そんな想いで胸一杯になる

底冷えのする日 稲刈りから帰ったまま庭で倒れた四十二歳の母

二十二歳で戦死した戦車兵の兄

八年の中国転戦で青春をなくして死んだもう一人の兄

横浜空襲で焼け出され 五十歳で病死した姉

劇団を起こしたが 二度も挫折し 四十歳で事故死した弟

その夢や希望やあるべかりし余生を

すべて私が托されて

生きてきたからではないのか

そうでなければこんなに長く

こんなに息災で

こんなに大事な仕事に

つぎつぎにめぐり合えるなんて

あり得ないことだ

古希を迎えた今日

私は改めて心に刻む

私を生かしてきてくれた

親兄弟 恩師 友人 先輩 妻の親兄弟

すべての人びとの思いに応え

志半ばで散っていった

人たちの分も引きうけて

命の限り働き続けることを

まだ六十路に入ったばかりの妻とともに

いま改めて心に誓う